

土器が語る。 郷戸一行展 2018/09/10-15 steps gallery Criticism by MIYATA Tetsuya Vol.214

郷戸一行（ごうどう・かずゆき）、ステップスギャラリー初個展である。郷戸は「1982年新潟県生まれ、2006年茨城大学卒業、2009年筑波大学大学院美術専攻日本画修了、個展やグループ展を多数行っているが、東京での展示は今回が初めてである」（吉岡まさみブログ）。

郷戸の描く世界は、いわゆる日本画である。抽象化されるギリギリ手前の段階の、具象を保っている。具象ではあるものの「実際のどこの場所」ということは問題にしていない。重要なのはその場所が持つ雰囲気、気配であろう。そこには「風土」や「国粋」といった嫌味は含まれていない。



ひたすらに、人間が生まれ、育ち、死んでいく「自然」との格闘なのである。そのような日本画は確かにこれまでも描かれてきた。明治期に歴史を捏造され、古美術と新美術が混在し、文展、帝展、日展から派生してフリーのアーティストにもその傾向は及ぶ。そのような負の歴史にも郷戸は確実に向き合い、どうにかしようとしている。

その証しに、郷戸は板張り、掛け軸、屏風といった、様々な支持体に自らの作品を乗せ、試している。現物が実際にあることによって、web 中心の曖昧模倣な時代に対して問いを投げかけている。それだけではなく、オープン粘土・箔・塗料による《雲丹型土器》も制作している。日本画家が嗜みとして陶器を作ることはあるが、「土器」であるとは凄い。土器を制作しているのであれば、絵画は日本画に見えても我々が全く知らない別の何かかも知れない。そのように考えると、日本画とは何か、芸術とは何か、それなら我々はこれから何をすればいいのかを再考すべきではないか。私は郷戸の作品と始めて巡り合った。郷戸のこれからの活動を、注目していきたい。

